

佐藤敬、従軍地からの手紙

一九四一（昭和一六）年五月、画家佐藤敬（一九〇六—一九七八年）は、同じく画家の猪熊弦一郎と共に、支那派遣軍報道班員として中国大陸へ出発した。これは、ある画家の逮捕から、周辺が取り計られたことだという（迫内祐司二〇〇七）。この約三か月間の従軍については、翌年のフィリピンへの従軍と共に、後に回想を書いているが（佐藤敬一九七九）、当時、鶴見区の留守宅に送った数通の手紙が資料室所蔵。佐藤美子資料のなかに残されている。これらの中の手紙から、佐藤敬の従軍の様子を紹介していこう。

山の市内外の敵の根拠地には百四十の爆弾をおとしました。幸ひにして全機無事その目的を果して無事帰着、大変得かたい感^{感銘}命を受けました」と綴つてある。同月、第四飛行団が台湾から転用、第十三軍協力の任務に当たつており、手紙が文字通りだとすると、「重爆隊亦全力ヲ以テ二次ニ亘リ出動シ衢^{衢州}及玉山ヲ攻撃シ敵軍事施設及集積中ノ敵兵車輛ヲ或ハ焼上セシメ或ハ爆碎セリ」(第三飛行集団戦闘要報新第一三号、五月一七日) に同行したものと思われる。

この後、「更に四五日主として飛行機による従軍を続け、再び南京に引きかへし、今度は漢口岳州方面の第一線に出る予定です」と述べている。この

かつた。漢口については「美しい街で
したが、さすが前線基地だけあって兵
員の動きに厳肅な感激を受けました」
と記している。この漢口には、「報道部
に美校の下級生があたので色々助かり
ました」とあり、漢陽や帰元禪寺・古
琴台・月湖へ「見物」に赴いている。
漢陽については「狭い街の両側はまる
でカイロかアラビヤの街のような不思
議な生活図でした」と感想を記す。
その後、「漢口には二泊、どうしても
最前線に出て行く方がいい」と云ふ事に
なつて、僕等も一度是非第一線の緊張
した空気を吸ひたいと思ひ、一昨日は
漢口を立つて軍連絡トラックに兵隊さ
んと一緒にのつて応城に向いました」
とあり、応城へ向かつた。「一日焼る太

月一八日上海からの発信（佐藤美子資料・資料番号IV-36-6）であるが、この手紙には「又南京に参ります」とあり、これ以前に南京におり、手紙も出していったようである。上海へは「急に浙江作戦に従軍する事になり、当地に参りました」とあり、次のように陸軍の重爆撃機に同乗している。

りその通りするつもりでゐます」とあります
り、陸軍の報道部と朝日新聞支局によ
る計画であつた。

従軍画家としては、「まだ作品は一
枚も出来ません。一通り従軍が終らな
いととても絵なぞ描くような気持にな
りません。絵はやはり静かに落ついて
初めて出来るものだと思ひます。が材
料と資料はうんと取りました」と述べ

が遊んでゐます。めずらしい色々な鳥が飛んでゐます、野兎も一向人を恐れず遊んでゐます。トラックは段々要路にはねかへりながら進んで行きます。腰をしたたか打つて悲鳴をあげます。朝九時出発して三時に応城の城壁をくどりました」と応城までの道筋を描写している。

然し不思議な美しい魅力に満ちてゐるもので」との感想や「ハングで大根の切ぼしの中食をこんなにうまくたべる前線の生活について、色々御知らせしたい事だらけですが、いづれ又書きましよう。一寸した戦争や軍人達の家を想ふ話を聞いては、すぐに涙もろくなる自分を不思議に思つてゐます」とも書いてゐる。

一重爆撃の飛行機は同乗する機会を得て、昨日は玉山の敵陣地の猛爆に参

正月二日第一報（心成）

継です毎日〈百度の暑い焼けるよ
うな街です」とあり、ここにおける生

またこの前日には妻の美子が藤原義江歌劇団のアイーダに出演する歌

一重爆撃の飛行機は同乗する機会を得て、昨日は玉山の敵陣地の猛爆に参加しました。基地より銀翼を聯ねて十四機の出動は実に堂々たるものでした。約三時間にして敵の飛行場を発見、すごい爆弾の雨を降らせたのです。又玉

五月二九日 第一線にて（応城）

その後、上海から南京に向かい、そして「南京を立つて漢口まで飛行機で来ました」（IV-35-3）と漢口に向

綱です毎日百度の暑い焼けるような街です」とあり、ここにおける生活では、「目下の所ドラマカンの御湯に入る事、日中木影で昼寝をする事が唯一の楽しみです」と記し、「精神的なものは一切影の如く消へてたゞ肉体の強

またこの前日には妻の美子が藤原義江歌劇団のアイーダに出演する歌舞伎座に電報を送るため、「又一日トルックにのつて漢口まで」行き、朝日新聞の通信局から電報を送つてゐる。応城には、「二三日ゐまして再び前線

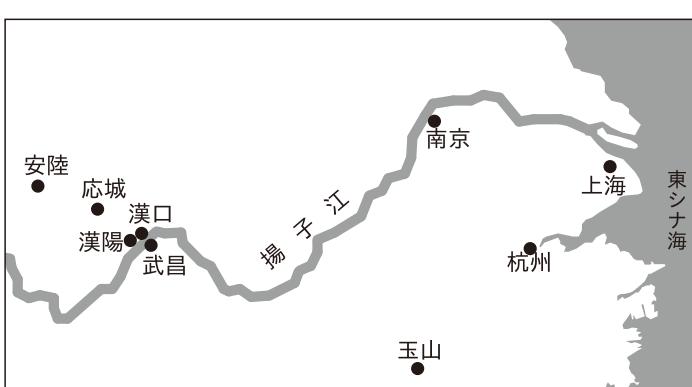


図1 関係地図

に出ます。安陸と云ふ所で残壕生活を二三日するつもりでゐます」とあり、
安陸へ向かう予定であつた。前日である「今夜は朝日の特派員の人々とニワ
トリを取り行つてごちそうを作らうと云ふ相談をしてゐます。うまく取れ
ると有難いです」と記している。

六月八日 ○○前線基地にて

五月三〇日、応城を出発して「長い
長い黄塵の道を灼熱の太陽にやかれト
ラックの激動に全身をいためられて十
二時間、安陸と云ふ最前線に出かけて」
(IV—32—1)、そこに滞在した後、「九
日目にやつとこ、まで帰りついた所で
す」と応城に戻り手紙を記している。
左藤故は、この安陸に向かう途中に京

山で負傷してしまった（佐藤敬一九七九）。「トラックの走行中不幸にして右手中指を手に思ひがけないけがをして、焼きつくようないたさをこらへて、こゝの医務室で治療を受け続けました」、「幸ひきずは悪いばいきんも入らず日一日と全快し大変大きいきずはのこりましたが、昨今ではすっかりよくなり、ほうたいも取り、手紙もこの通りしつかり書いてゐますから御心配は入りませんが、その当時はとても苦しかったです」と記している。七月一〇日の手紙には、「僕が前線でけがをした事意外に大きく方々につたわつてゐる事困りますねうか皆なさんに何んでもない事御知らせ下さい」とあり、関係者には大きくなつてゐたようである。



写真1 従軍の様子
(佐藤美子資料IV-32-1)

安陸については「爆撃の跡もものすごく廃屋がるい／＼と裸身の如くならび、日中百五十度の温度に燃へてゐる街です。街と云つても日本軍の多くと土民の少數しかいない生活のない街です。たゞあるものはマラリヤと疫病の流行です」と述べている。昼は「寒だん計がいつも／＼最上まで登りつめて百二十度以上は何度かわからない暑さ、「夜は電気は勿論火の氣のない暗い夜」であったが、「それでも朝晩少しづゝ、スケッチを続けました」とある。この手紙では「前線の実感を少し伝

翌日、そこを出発し、「こ、からトラックは入りません。もうこの辺はがたる山脈の中で云ふ所の大洪山山脈となり、山上の陣地へと向かつた。そ

つかの最前線まで赴いている。行程は「しよせん道なき道を進むのです。ト ラックは十名位の兵隊の掩護の下に、まるで波の上にたゝかれる小舟のよ うな激動振りです。顔はふけどもくま るで黄色の粉オシロイをたゝきつけら れるような黄塵の熱風です」との状態 であった。到着した「黄○○と云ふ甚 地」において宿泊している。

固な陣地ですが敵は目の下に居ます。肉眼でもよく見へます。遠目がねで見れば一手一足の動きまで実によくわかる」ほどの近さであつた。ここのは様子を「いよ／＼敵は草むらにチエツコの機関銃をすへました。パンパンパン、ヒュツ、ヒュツとハンカチをやぶるような音が聞へます。火をふく敵は夕やみと共に我々の陣地を打ち始めました。(撃ち始め)

兵隊は〇〇名しかゐませんが、たい然として敵に向ひます。これは演習ではないのです。実戦です。僕と弦さんはめがねのうばひ合ひで陣地の一角からながめます。まだ明るい夕暮です。すつかり目の下に敵の少しの動きも目に映じます。ヒュッとたまが頭上をかすめます。思ひよいと頭をちじめる気持は決して恐しいからではなくたゞ反射的にをこる運動です。夜が深くなる所敵はうちやみました」と記している。「我々は兵隊さんと一緒に石窟の陣地の中に一夜を送る事になりました」とそこに宿泊した。後の回想では、この

勿論敵の弾丸の下をくぐる決心です。一命を天にまかせた静じやくの心境です。山ははるかにそびえてゐます。一步一歩登りました。勿論多くの護兵と××部隊長自からの案内ですが、一寸のゆだんもなりません。第×陣地にいた時は、あゝつかれた頭に國にのこした妻や子供を思はない訳に行きません。第×陣地まで草の中にしへている。「然しこゝではまだ敵の陣地とは遠いので」、「更にいよ／＼最も敵と密接してゐる×陣地まで草の中にしへて進みました」と、更に近い陣地に向かつてゐる。

「いや、二体を思ひない詩に行きなが
んでした」と到着するまでの様子を述べている。「然しこゝではまだ敵の陣地とは遠いので」、「更にいよ／＼最も敵と密接してゐる×陣地まで草の中に一のび木の影に身をふして山の背にかくれて進みました」と、更に近い陣地に向かっている。

目的の陣地には夕方に到着した。こ
こは「石をつみ上げ巨木で圧したけん

振りを全身に感じながら、今は知感も忘れはて、トラックの中でいねむりを初めました」と記している。

この手紙の翌日には、応城から漢口に戻る予定で、「明日漢口にたちます。未だ漢口南京で少しも仕事をしてないです」と、漢口などでは仕事をするこ

とになると記している。

この手紙には、写真が同封されている（写真1）。裏面には、「これは、パパが兵隊さんになって、鉄砲を撃つているところを、猪熊おぢさんが写真を撮っているところです」（原文カタカナ）とあり、場所は分からぬが、銃を構えている人物が佐藤敬のようである。

六月一八日 漢口

応城から漢口への帰路も、往路同様にトラックに同乗した。往きは炎天下であつたが、帰りは「雨の後のぬかるみの悪路です。丁度前に行つてゐた別

の隊のトラックがすべつてクリークの中に逆転しました」とぬかるみの中を帰ることになつた（IV-36-3）。

漢口では、「多くの中国文化人との座談会をやらされたり、新聞関係の用事が出来たりして」一週間程の滞在となり、「いよいよ本日出発致します」と南京へ向かうことになつて。往路は飛行機であったが、「今度は揚子江を船で下ります。三日で南京に着く予定です」と揚子江を船で下る予定であった。



写真2 息子亞土に送ったトラックの絵
(佐藤美子資料IV-37-8)

という絵はがきでは（IV-37-4）、「船で長い長い黄色の水の流れている川を、お船で下っています。いろいろな山や、街が見えます。亞土やママにも見せてあげたいと思います」（原文カタカナ）と書き送つてある。

六月二十四日 南京にて

南京には、二一日には到着し、届いていた息子亞土の絵や写真の感想を絵はがきで送つてある（IV-37-3）。この中で一週間ぐらい仕事をして上海へ向かうと書いてある。

この地では「私達は毎日南京のあちこちを写生をして廻つてゐます。描く所は多いし時間はないし、なかく作品も出来ませんが全力を尽してゐます」とあるが、一方で「然し今度の旅行は所謂御土産絵を多く描いて持つて帰るよりも云へない生活の臭ひを持つてゐる」と思ひますが、どうも僕等の感じるプライステイクからは遠い風景です。しかしそこに浮かんでゐる画房（長椅子を並べた美くしい支那式の船です）は何とも云へない生活の臭ひを持つてゐる美しい船です。この船で湖上を一廻りする訳ですが、この上で毎日いとなまれるであろう若い人達の感激、人間の喜劇、あらゆる悪徳、そうした人間をつゝむ自然の影一二枚ばかりスケッチをしました。玄武湖は南京城壁をつくるために掘つた人工の

湖だと云はれます。支那人の神経の大きさにはあきれます」また

「昨日は鶏鳴寺と云ふ古寺に行きました。この寺はすぐ玄武湖の上にあつて紫金山と南京大觀をするのに都合のいゝ寺です。こゝも大変美しい展望でした。

今日もこれからそこに出かけます。とても日

て未知のものを色々知つた勉強の方が私は大いに栄養になつたようですね」と述べている（IV-36-5）。

南京については、「南京は美しい風景の街です。こうした雑々とした世相に超然として古い寺や湖が自然の不思議な魅力をほこつてゐます」と述べて、

「昨日は一步城壁を出て玄武湖に写生に参りました。アカシヤと楊樹に取りかこまれたこの湖はとても美くしい

と思ひますが、どうも僕等の感じるプライステイクからは遠い風景です。しかしそこに浮かんでゐる画房（長椅子を並べた美くしい支那式の船です）は何とも云へない生活の臭ひを持つてゐる美しい船です。この船で湖上を一廻りする訳ですが、この上で毎日いとなまれるであろう若い人達の感激、人間の喜劇、あらゆる悪徳、そうした人間をつゝむ自然の影一二枚ばかりスケッチをしました。玄武湖は南京城壁をつくるために掘つた人工の

七月二日 南京市泰山閣にて

南京滞在は「日一日と予定よりのびてゐます」、「総軍報道部にのこす油絵と朝日の御礼の油絵を描ひて行く方があとで心配がないので始めた次第です。今日で出来上りました。あとまだ

朝日の新聞用絵の原稿が六枚あります」と、日々、軍報道部へ残す絵や朝日新聞へのお礼の絵画を描いていた（IV-35-4）。また、市内を写生に廻り、

「漢口や九江のヨーロッパ的なのに反して、こゝの裏街は純粹な支那です。こわれた家、はげ落ちたレンガの壁、ベンキのあざやかな色等、とても面白

中暑いけれど深い木立にかこまれてゐるこの寺はまだ仕事が樂です」と各地を廻つてゐる。

日程的には、「もうそろゝ帰る用意に取りかゝり」、「上海で都合した経済的なもの、後しまつと」、この従軍の目的である「南京報道部に對する仕事の責任」が、残る課題となつてゐた。

また、二二日のドイツ・ソ連の開戦を知り、「全世界を取りかこむ新しい人間の感動、精神、能力、そうした形似上學的な世界に於ける人間性の新たな誕生について考へさせられるものを強く感じてゐます。これからは旧い感情や感覺ではものを理解する事は困難となりましよう。又組織力や技術や体力なぞも其の価値が段々変つて参りましよう。いよいよ大変な時代になつたと思います」との感想を書いてゐる。

意に取りかゝり」、「上海で都合した経済的なもの、後しまつと」、この従軍の目的である「南京報道部に對する仕事の責任」が、残る課題となつてゐた。

意に取りかゝり」、「上海で都合した経済的なもの、後しまつと」、この従軍の目的である「南京報道部に對する仕事の責任」が、残る課題となつてゐた。

関係余りスケッチも出来ません。それでも一通りは描きました」と感想を述べている。

一方で朝日や報道部などの「宴」にも招待されている。例えば、前日には「昨夜はとても素晴らしい画房上の盛宴でした。朝日の支局長の招宴で支局の一団と我々で玄武湖上に美くしい舟を浮かべて—所謂フラー・ボートです—チキン・ボートを従へて湖上に出来ました」、「一流の飯店から來た支那人の料理人がすぐ後の舟で鴨を丸焼きにしてゐる臭が食慾をそそります。まるで熱湯の中にあるような南京も、こゝまで來ると別の世界です。とても楽しい食事でした」と記している。

南京を出発し、上海には九日頃に着いたようである。ここでは「上海画廊」に六、七点絵をのこす必要があり、これを毎日一枚ずつ手をつけて約十日間で仕上げるつもりでゐます。もう今日は二枚目ですが、なか／＼うまく進みません」（一〇日付、IV—35—5）、また一六日付の手紙でも「目下毎日八時に起きて夕方まで仕事をしてゐます。もう五枚目に手をつけました。出来るだけ多く仕事をして借金の額を少なくしたい一心です。帰つて日動に多少は払はなくてはならないかと思ひますが、それが出来るだけ少なければ気が楽なわけです」（IV—35—6）と、毎日、

画廊に残す絵を描いていた。

一方で「夕方は大底^{〔大抵〕}どこかによばれて、猪熊君と二人切りで食事をする日は当地に着きまして一夜もない有様です」（二六日付）とあるように、南京同様に軍・朝日新聞や画廊関係などとの付き合いも多かつたようである。例えば「上海は清野、笠原、広ちゃんと新制作の出品者村尾さんを初め三人ばかりゐますので、毎日夜はにぎやかです。朝井君も長坂春雄君も二三日前までゐました」（二〇日付）や「一昨日は宏太郎君と会社の副支店長がフランス借界のア・ラ・ロトンドと云ふレストランに二人をよんでもくれまして御馳走になりました。丁度七月十四日カトウズ・ジュイエで、久し振りにフランスへ行つたようでした」（一六日付）、「昨日は南京より朝日の南京支局長の石尾さんが来まして上海で一等大きいパーク・ホテルで四五人で御馳走になりました。これはやはり英租界の中心にある十九階のすごいホテルです。それから朝日の車を出してフランス租界一帯のドライブを致しました」、「明日は軍報道部関係の会食が予定されてゐます」などであつた。また、絵画以外の仕事では、「今夜は当地の大陸新報社の文化問題座談会です。日本人クラブで丁度独立の会員が来てゐましたので、その連中と一緒に美術を主に話しました」もあつた。

つたようでした」（一六日付）、「昨日は南京より朝日の南京支局長の石尾さんが来まして上海で一等大きいパーク・ホテルで四五人で御馳走になりました。これはやはり英租界の中心にある十九階のすごいホテルです。それから朝日の車を出してフランス租界一帯のドライブを致しました」、「明日は軍報道部関係の会食が予定されてゐます」などであった。また、絵画以外の仕事では、「今夜は当地の大陸新報社の文化問題座談会です。日本人クラブで丁度独立の会員が来てゐましたので、その連中と一緒に美術を主に話しました」もあつた。

ところで、帰国が近づくと「御土産」についても言及している。一〇日付に

は、「木綿とタオルは常識で持てるだけは持つて行きます。〔略〕コーヒーも少し持つて行けるでしよう。靴は入りませんか一足位なら持ち得られるかも知れません。キッドの白靴の素晴らしいものがありますよ」と書き、また「特にほしいものがあつたら御知らせ下さい」と書き送っている。しかし、一六日付では、「御申出の品々丁度内地持込困難の品で困りました。皮類、毛織類は特にやかましいのです」とあり、日本国内に持ち込めないものが多くた。それでも「ベニは村尾さんにたのんでラシとタオルを、上海画廊の清野君がコーヒーをそれぞれ買って呉れました」とあり、息子へは「美しい西洋の絵本と珍しいオモチャ」(原文カタカナ、IV-37-10)を選んでいる。上海では、「絵具カンバスはルフランがまだ手に入ります」(一〇日付)と、戦時の国内では手に入らないものが流通していた。

をテーマにした作品を依頼」されたが、結局、描かなかつたので問題になつたという（佐藤敬一九七九）。同年九月の新制作派第六回展には、「安陸戦趾」、「安陸前戦」などを出品している（大分県立芸術会館一九七九）。また、陸軍省海軍省編纂『靖国の絵巻』昭和一六年秋季（陸軍美術協会、一九四一年一〇月）には、「陸鷲巫山爆撃」が収載されている。この巫山爆撃は八月八日とあり、玉山爆撃を参考にしたものであろう。この他、『朝日新聞』紙面にも、七月末から八月中旬に「中支・夏の彩管行」として、佐藤・猪熊と支那派遣軍報道部の志生野少佐・鷹尾中尉による「絵に見る戦争」の感想」を絵とともに連載している。先に見た「新聞用絵の原稿」が、これであろう。

【参考文献】

佐藤敬『遙かなる時間の抽象』（アドバンス
大分）一九七九年、針生一郎ほか『戦争と
美術 1937-1945』（国書刊行会）二
〇〇七年〔迫内祐司〕二〇〇七は同書、佐藤
敬画の解説」、「佐藤敬遺作展」（大分県立芸
術会館）一九七九年、防衛庁防衛研修所戦
史室『戦史叢書 中国方面陸軍航空作戦』（朝
雲新聞社）一九七四年、同『戦史叢書 支
那事変陸軍作戦3』（同）一九七五年。「第
三飛行集団戦闘要報新第一三号」は、アジ
ア歴史資料センターRef: C04123000100昭和
一六年「陸支密大日記 第一八号」（防衛省防
衛研究所）、「清國の絵巻」は、國學院大學

—37—10) を選んでいる。上海では、「絵具カンバスはルフランがまだ手に入ります」(一〇日付)と、戦時の国内では手に入らないものが流通していた。帰国は「十七、十八両日の飛行機を朝日より特別便で申こんであるのです」とあつたが、「この数日天候不良にて欠行のため二三日おくれる由でがつかりしました。多分十九日か廿日頃に乗れる事になるそうです」(一六日付)と天候のために遅れている。その後、七月中に帰国している(朝日七月三二日夕)。

帰國後

出発前に、佐藤と猪熊は「軍報道部より記録画として、中支復興平和建設